

平成27年(第9回)みどりの学術賞選考委員会
委員長コメント

平成27年(第9回)みどりの学術賞受賞者の選考にあたり、選考委員会は、「みどり」に関する学術研究に造詣の深い全国の学識経験者約500名の方々に対し、受賞に相応しい候補者の推薦を依頼しました。

その結果、延べ90名の学識経験者の方々から、約60名の候補者の推薦が得られ、多様かつ大変幅広い研究分野から、受賞に相応しい研究者のお名前を挙げていただきました。

選考委員会は、推薦のあった方々の業績を慎重に調査・審議し、今回は最終的には、造園学や生態学分野で活躍されているお二人の方が受賞に相応しいとの結論にいたりしました。

受賞者のお一方は、造園学の分野で、日本庭園が日常生活から隔離された特殊な空間ではなく、自然との共生により育まれてきた、我が国の生活・文化、すなわち「農の風景」を凝縮したものであることを明らかにするとともに、景観の保全や育成など、市民活動の重要性を説き、全国各地で見られる市民農園や里山ボランティアの底流を形作るなどの功績を挙げられた、東京農業大学名誉教授の進士五十八博士です。

もうお一方は、植物生理生態学の分野で、植物群落における太陽光の利用というマクロスケールの生態学を、個々の葉内での光利用というミクロの生態学へと発展させ、一枚の葉でも、表面、裏面それぞれに違った性質があり、葉全体の光合成の効率上昇に寄与していることを明らかにして、葉緑体分化の謎を解明するなどの功績を挙げられた、東京大学大学院理学系研究科教授の寺島一郎博士です。

受賞者お二人の研究は、学術研究として先駆的であるだけでなく、類いなき視点からの異分野融合研究や新領域研究を推し進めるなど、学術の発展に大きく貢献した優れた業績であると同時に、みどりを深く理解し、どのように活かして行けば良いのかという羅針盤とでも言うべき道筋を示され、みどりに対する国民の理解増進にも大きく寄与されてきました。

両博士の永年に渡るご研鑽に対し、心より敬意を表するとともに、受賞を契機として、国民の方々が「みどり」に対する関心を深めると同時に、我が国が、国際社会から高い評価と崇敬の念を勝ち得るのに役立たれることを念願する次第です。

平成27年3月9日

みどりの学術賞選考委員会委員長
黒岩常祥